学年だより

学び 伝え 前進する

令和６年１１月１２日
町田市立小山田中学校
第３学年　学年だより
第２１号

合唱祭の作文を紹介します（その３・最終号）

【４組】（金賞・クラス曲「はじまり」）

「３年生らしさ」

３年生らしい歌声を響かせたい。これは美術部として垂れ幕に込めた想いでもあった。１年生は大きな声で元気な歌声を、２年生は音程を意識した繊細な歌声を。３年生にはどんな歌声が似合うのだろう。１、２年生のハードルを大きく跳び越えるようなものとは一体どんなものだろう。合唱練習を始めて１つめの疑問。

部活の後輩に聞いてみた。「何歌うの？３年やばいかも」と。返ってくる答えは「〇〇です！やっぱり３年生凄そう！」ほとんどがこうだった。「凄いもの」が求められているらしい。その時の私のイメージでは、何かこうぐわーっと、衝撃がどーんとくるようなもの、といったざっくりとしたものだったと思う。

しかし、練習を重ね、クラス曲が形になっていくにつれて、これが本当の「凄いもの」ではない気がした。本当の「凄いもの」とは、ずばり、一人ひとりの思いが「凄いもの」につながる。いや、具体的な内容じゃないのか、と思ったそこのあなた、正解です。一人ひとりが合唱祭にかける想いは何だっていい。金賞を獲りたい。家族に堂々と歌っている姿を見せたい。後輩の目に格好よく映りたい。モテたい。自分の中にある強い想いが、誰かの心に響く歌声を作ることができると思った。練習の時にうまくいかないことも多くあった。誰かの前に出ることが恥ずかしいと思うことも何度もあった。そんな試練を乗り越えた先にあった金賞はとても美味しかった。

「４組だからこその合唱」

今回の合唱祭は、私にとって３年間で一番の合唱祭になりました。

４組の合唱は、本番３日前までまったくまとまっていませんでした。とても熱心に歌っている人や、合唱中に話している人など、合唱祭にかける熱量が、個人によって大きく違いました。この差が合唱に表れ、クラスの状態はあまりよくありませんでした。私も、大きな声を出していても、本当にこれでいいのかな、と矛盾したような不安を感じました。

しかし、本番３日前、武藤先生が私たちに「本当にこのままでいいの」と、私たちの心の声を代弁してくれたかのように、喝を入れてくれました。そこから私たちは全員が一体となって、合唱に取り組みました。歌い終わった後、全員で拍手をし合ったときは、大きな達成感があり、皆が笑顔を浮かべていました。このとき初めて、４組の目に見えない歯車がかみ合ったような気がしました。

そして本番当日も、クラス全員が一体となり、歌いきることができました。結果を聞いたときは、４組が一番驚いていたと思います。全員が最後までクラスを信じ続けたからこその結果だと思います。

私は、今回の合唱祭を通して、改めてクラスが一つになることの大切さを知りました。声を張り上げてクラスをまとめてくれた実行委員、限られた時間で仕上げてくれた伴奏者、喝を入れてくれた先生、そして最後まで信頼し合って歌い続けたクラスメイト。誰が欠けても、金賞は獲れませんでした。だからこそ、今回の合唱祭は私にとって最高の合唱祭です。